甲州鬼瓦

KOSHU ONI-GAWARA — Gargoyle Roof Tile

1995 年
（平成 7 年）
山梨県
郷土伝統工芸品 認定

瓦づくりの産地から、伝統技法を受け継ぎ、地域の文化をつなぐ

南アルプス市（旧若草町）加賀美地区の瓦づくりの起源は、約３００年前からといわれており、江戸時代、享保年間に三河（現在の愛知県）から取り入れられた製造技術により発展しました。幕末の甲府城修築の際には、「瓦御用」をつとめるなど古い歴史と伝統をもちます。

この地域は、御勅使川扇状地の先端で、粒子の細かい粘土層が露出していたこと、良質な水が容易に得られたことなどから、瓦づくりが盛んになりました。明治36年の中央線開通以降、この地域の瓦は東京・横浜など県外まで販路を拡大し、終戦後、最盛期の昭和25年頃には瓦づくりを行う家は三十数軒に及び、

あらじ取り

かけやぶり

たたきで土台を接着

鬼面の基本になる板をつける

品質、生産量とともに県内随一を誇っていました。しかしながら、交通手段の発達、後継者不足、良質の粘土の不足などにより徐々に衰退し、昭和62年には地区で最後の瓦製造業者が廃業することとなりました。

平成元年に、約３００年の歴史と伝統技術を後世に伝えていく目的で、若草町商工会が中心となり今までの伝統技術を使った甲州鬼面瓦を開発、平成5年には後継者養成のため「甲州鬼面瓦制作工房」を開設。平成10年には「若草瓦会館」が設立され、以降現在に至るまで、瓦の歴史や鬼面瓦の展示、体験工房の運営等が行われています。

甲州鬼瓦の技術・工程

土練り

瓦用の粘土を手と足で練る。

あらじ取り

造る鬼瓦に合わせて板荒地（粘土板）を型取る。

目を開けて完成

鬼面の制作

（工程画像提供：若草瓦会館）

磨き

粘土を針金で長方形に切り重ねていく。

かけやぶり

板荒地を貼り合わせるため、かけやぶり（かきやぶり）で接地する。たたきを使い、平らにして鬼瓦の土台をつくる。

鬼面制作

粘土を盛り、鬼面部分を成形。口、目、ハナ、ツノ等をつける。粘土を盛ったり削ったりしながら顔を整え、ヘラで細部を仕上げていく。

磨き

ある程度の硬さになったら、金ベラで表面を磨く。目を開けて形状が完成。

乾燥

２～３日後に、天日に干し十分乾燥させる。

焼成

窯に詰め約１１００℃以上の高温で焼成する。

燻化

焼成した瓦を燻す。窯から出しススをはらうと美しい燻し銀の瓦が完成する。

甲府城 稲荷櫓の鯱瓦再現の様子（画像提供：若草瓦会館）

地域とともに瓦の歴史をつなぐ

一度は産業として途絶えていた鬼瓦を工芸品として復興するにあたり、身延山大学教授で彫刻家の柳本伊左雄氏の原型をもとに鬼面瓦が制作されました。現在、鬼瓦の職人「鬼師」として若草瓦会館の館長を務める永利郁乃さんは、身延山大学で仏像の制作や修復を学んだ後、若草瓦会館に入り、鬼師となりました。現在も、身延山大学の仏像制作修復室での仕事と兼任で館長を努めています。会館では、鬼瓦の制作や体験工房の運営だけでなく、甲府城の稲荷櫓の鯱瓦（しゃちほこかわら）の再現や、道の駅・富士川の展望台に設置されている、旧春米学校の屋根にあった鯱瓦の復元等、歴史的な瓦の再現制作にも取り組んでいます。また、毎年2月10日・11日に開催され、甲府盆地に春を告げる祭りとして400年以上の歴史を持つ「十日市」にあわせて、「瓦作品コンテスト」の開催や、「甲州十日市だるま」「大張子」等の縁起物を企画製作するなど、地域の人々と伝統文化をつなぐ取組みが行われています。若草瓦会館は、瓦産地の伝統文化を、地域内外の人々が身近に体感できる場となっています。

瓦を焼成する窯。燻化によりいぶし銀に仕上がる。

瓦制作の道具。金ベラで磨くことで表面に滑らかなツヤが出る。

若草瓦会館に展示されている明治～昭和初期の粘土瓦製造工程。木彫で再現されている。

若草瓦会館・館長の永利さん（左）と職員の深沢さん（右）

若草瓦会館　瓦づくりの体験は、電話での事前予約が必要。

■産地連絡先

若草瓦会館（若草まちおこし協同組合）

〒400-0335　山梨県南アルプス市加賀美 2605-5

TEL：055-283-5870　FAX：055-283-5871

市川大門手漉和紙

ICHIKAWA DAIMON TESUKI WASHI — Handmade Japanese Paper

1995 年
（平成 7 年）
山梨県
郷土伝統工芸品 認定

素肌のように美しい「肌良」と呼ばれた、千年つづく紙の産地、市川大門。

山梨の和紙の歴史が記述に残る最初のものは奈良時代、図書寮解「諸国未進紙並筆紙麻等事」の一覧に、甲斐国が記載されています。市川の紙漉きについては、市川大門の南にあった平塩寺の旧記に、延応二年（１２４０年）には多くの漉家があったと記されており、この頃には紙漉きが行われていたと考えられます。その後、武田氏の時代には、美人の肌のように美しいとの例えから「肌吉紙」と呼ばれ、徳川氏の時代には御用紙として献上、この紙を漉く人たちは「肌吉衆」と呼ばれ諸役免除などが与えられて手厚く保護されていました。その後、市川の和紙は近代化の波とともに機械による製紙産業へと発展し、障子紙では全

国トップのシェアを誇る産地となりました。

このような流れの中で、次第に手漉き和紙を手掛ける企業は減少し、現在は豊川秀雄さんがこの地で唯一の手漉和紙職人です。豊川さんは、20歳で和紙職人となり、50年以上、「やまなしの名工」や「町の無形文化財」にも選ばれています。豊川さんのお父さんの時代には、250軒ほどあったという手漉和紙の伝統を守るため、日々和紙を漉きつづけています。

市川手漉和紙は、原料に楮と三椏を主に使用します。豊川さんは、そこに山梨のぶどうの蔓の繊維を漉き込んだぶどう和紙や、地元の特産品であるとうもろこしや大塚にんじんを漉き込んだ和紙など、手漉きならではの新しい紙づくりにも取り組んでいます。また、毎年地元の小学校・中学校で、卒業証書を子供たちが漉く体験に協力し、地元の和紙文化を次の世代に伝えています。

市川大門手漉和紙の技術・工程

煮熟（しゃじゅく）
紙の原料の楮や三椏などを薬品と一緒に平釜で煮て、不要な非繊維質を溶解し、紙を作るのに必要な繊維を取り出す

洗浄ー漂白ー洗浄

チリ取り
手で表皮や不要物を除去する

叩解・分散
強靭な和紙を作るために、ビーターで繊維をほぐす

原材料配合

紙漉き
漉きぶねの中へほぐした繊維と「ねり」を入れ、よくかき混ぜて簀桁（すげた）を用いて紙を漉き上げる

湿床付け

搾水
プレス機で水をしぼる

乾燥
乾燥機に貼り付けて乾燥する

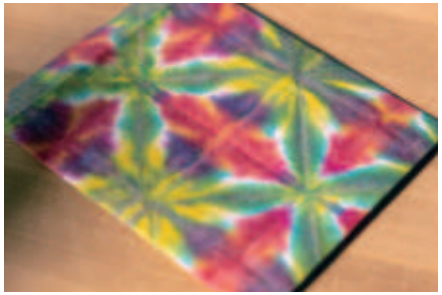
市川和紙の主な原料である、楮と三椏。

次の世代へ手漉和紙をつなぐ、夢工房

市川大門の手漉和紙を未来へつなぐ取組として、平成28年度から町、商工会、和紙組合で後継者育成の取組が進められ、令和2年3月に「市川手漉き和紙　夢工房」が完成しました。現在、2名の後継者が、豊川さんに紙漉きの技術を教わりながら、この夢工房でも技術習得のために経験を重ねています。工房のオープンに向けては、クラウドファンディングを活用して、より大きな紙を漉くための用具を揃える等、市川の手漉和紙を広く知ってもらう活動にも取り組んでいます。後継者の技術習得の場としてだけでなく、広く一般の方に和紙づくり体験のコースも準備し、はがきや名刺の手漉き体験から、和紙を使った折り染めやランプ制作、アクセサリー制作など、新しい手漉和紙との出会いも提供できる施設となっています。夢工房の渡辺さんは、市川大門出身で、お父さんの助言から手漉和紙職人を志し、京都の伝統産業専門学校を卒業後、町の職員として夢工房へ採用となりました。手漉きの技術を磨きながら、アクセサリー等の新しい和紙の可能性にも挑戦しています。新しい担い手によって、手漉和紙の伝統が未来へとつながれています。

山梨県内のぶどうの繊維も紙に漉き込む

豊川さんの手漉の楮和紙が使われた線香花火の製品
花火は市川の伝統ある産業として有名



市川和紙工業協同組合に隣接する「市川手漉き和紙　夢工房」 https://yumekobo-washi.jp
折り染め体験の試作（左）　手漉き体験以外にも和紙を使った体験コースがある。
コロナ禍のオープンとなったが、今後は体験できる観光施設としても期待が集まる。

■生産者

豊川秀雄

〒409-3601　山梨県西八代郡市川三郷町市川大門 1362-2

TEL/FAX：055-272-0075

市川手漉き和紙　夢工房

〒409-3601　山梨県西八代郡市川三郷町市川大門 1725

TEL/FAX：055-272-5137

山梨貴宝石

YAMANASHI KIHOSEKI — Gemstone Cutting

ペンダント〈天狗の葉団扇と紫水晶〉（山梨ジュエリーミュージアムコレクション）

1996 年
（平成 8 年）
山梨県
郷土伝統工芸品 認定

ジュエリー産地山梨を支える、宝石研磨職人の熟練の技と新しい探求

今から約千年前、御岳昇仙峡の奥地金峰山で水晶の原石が発見されたことが、甲府での水晶細工の起源といわれています。江戸時代1834年（天保5年）頃、京都の玉屋弥助という人物が、水晶の買い入れのために甲州へ出張し、何度か訪れる度に水晶研磨の技法を伝承したと伝えられています。江戸末期に横浜港が開港すると水晶加工品は国内向け以外に外国商館にも販売されたようです。明治初期になると政府の勧業政策もあり、甲府の勧業試験場に水晶加工場が設けられ、加工道具なども発達しました。明治中期になるとこれまでの水晶玉や水晶の置物に加え、ブローチ用の水晶のカットも始められました。昭

和初期には、研磨技術が躍進を遂げ、パイプ、ブローチ、ペンダント、ネクタイピンなど様々なものがつくられるようになってきました。戦時下で一時装飾品の加工は難しくなったものの、研磨技術は水晶発振子、レンズなどの軍需産業に転換されて残り、戦後に工芸として復活を遂げました。戦後は高度経済成長に伴ってジュエリー産業が目覚ましい発展を遂げます。宝石の研磨技術は、国内最大の宝飾産地「山梨」の発展を支える原動力となってきました。原石から何通りもの工程を経て、熟練した職人の手により、輝きある貴宝石に仕上げられていきます。

宝石の研磨加工方法はたくさんありますが、表面に角度の違う多数の平面（ファセット）をつくり、宝石を最大限に輝かせるファセット・カットと、ドーム型や丸型などに磨き上げるカボション・カットのふたつに大きく分類することができます。

山梨貴宝石の技術・工程（一例）

割込（かっこみ）・小割

石にタガネを当て、小鎚でたたいて欠きながら、また、小さい物はやっとこで割り形を整

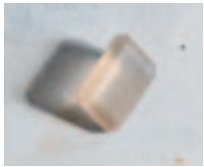
える。かつてはかっこみ専門の職人がいたが、現在はほとんどが切断機で行われる。

粗摺り・中摺り・仕上げ摺り

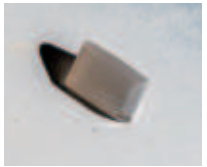
平面研磨盤を使って、原石にカットを施す。最初は目の粗い砂（研磨材）で形を整える。段階的に、より細かい研磨材に変えて仕上げていく。

木砥みがき

欅（けやき）の回転盤を使い、青粉（酸化クロム）をつけて磨き上げる。

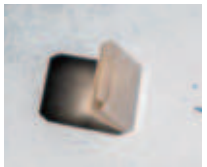


③仕上げ摺り後



①荒摺り後

④木砥みがき後



②中摺り後

一般的に宝石を研磨する場合、ファセッターという治具を使用します。

今回工程を撮影させていただいた清水幸雄さんは、山梨でも数少ない「手摺り」と呼ばれる、治具等を使わずに、手に石を持ち指先の感覚だけで、正確なカット面を作り出す、熟達した技術を持つ研磨職人です。

研磨技術のオリジナリティで、山梨産地ならではの魅力が生まれる

山梨県甲府市は「宝石の街」として知られ、現在も宝石加工の技術を持つ工房が数多く集積しています。山梨では、毎年研磨宝石の新作展示会「ジェムストーンフェアinKOFU」が開催され、県外からも多くのバイヤーが集まります。また、近年は鉱物ブームやSNSによる広がりも影響して、一般の方がルースを求める人気も高まってきており、各地で開催されるミネラルショー等にも山梨の企業が多数出展しています。産地の研磨職人たちは、世界各国から原石を選び集め、それぞれがオリジナリティあるカットを開発するなど、山梨の貴宝石の価値を高めるために、切磋琢磨を続けています。

キキョウカットは、正五角形12枚で囲んだ正12面体をベースに、それぞれの五角の中心に向かって稜線のある5面のファセット・カットをし、合計180面を有するカット。唯一、宝石研磨職人の清水幸雄さんだけが手摺りでつくることができる。

「甲州貴石切子」表面にカットを、底面に切子細工を施したルース。産地の研磨と彫刻の技術が合わさって生まれた。
（画像提供：ジュエリークラフトフカサワ）

■産地組合

山梨県水晶宝飾協同組合

https://yja.or.jp

〒400-0866　山梨県甲府市若松町4-5

TEL：055-232-7571　FAX：055-232-8935

富士勝山スズ竹細工

FUJI KATSUYAMA SUZUTAKE ZAIKU — Bamboo Basketry

1998年
（平成10年）
山梨県
郷土伝統工芸品 認定

富士山で採れるしなやかで強いスズ竹を、繊細に編み上げる笊（ざる）づくり

この地域での竹工芸品のはじまりを示す明確な資料はないものの、最も古い記録では、甲斐国志（1814年）に「篠（スズ）、富士の北麓ニ叢生スルヲ、本栖、精進西湖諸村ノ里人苅リテ河内領、郡内領ニ担販ス箕（ミ）、笊籬（イザル）、魚籃（ビク）ヲ造ル具ナリ」とあり、少なくとも江戸後期には富士山から採れるスズ竹を材料として笊づくりが行われていたことがうかがえます。「勝山村史」によると主に河口湖の南岸・富士山麓側の地域（勝山村・船津・小立・大嵐・鳴沢）を中心に笊が生産されていました。これらの地域は稲作に適さない土地であったことから農間の副業として笊づくりが行われました。野菜とともに笊を背負って甲府や富士吉田方面に出かけ、米麦などの雑穀と交換することを「コメクミ」「コククミ」と呼んだそうです。大正期に入り、同地域の養蚕業の衰退にともなって笊づくりが盛んになり、大正2年（1913年）には勝山村だけで8万個を生産していたという記録があります。大正期には共同販売組織として「甲州笊生産副業組合」が設立され、大正14年（1925年）には全国副業展覧会に製品を出品し、林産の部で一等賞を受賞したとの記録が残っています。

日中戦争から太平洋戦争中には笊の製造技術を応用して、南方の戦地で使用するヘルメット型の防暑帽体が軍用に作られました。昭和11年頃から作られはじめ、昭和16年には「勝山村防暑帽体製造組合」が設置されます。戦時中の資料によると1年に35万個程度の供給力があり、昭和19年頃には勝山村内の8割以上の家庭で防暑帽体が作られたそうです。

終戦後にはふたたび笊づくりが復活し、昭和30年代まで次第に笊の生産が復活していきましたが、以降プラスチックやステンレスの製品が普及したことで家庭用品としての竹笊の需要は大きく低下し、また地域産業の多様

化や河口湖が観光地として発展したことにより、副業として笊づくりを行う農家もほとんどなくなっていきました。

勝山村では昭和54年に、村おこしの一つとして伝統ある笊づくり技術の保存、伝承を目的として「勝山村甲州郡内ザル学校」を勝山村老人福祉センター内に開設。地域の高齢者が担い手となり、一時衰えかけた笊づくりが伝統工芸として復活し、受け継がれる基礎となりました。平成9年に「富士勝山スズ竹工芸センター」に名称変更し、平成10年には「富士勝山スズ竹細工」が山梨県郷土伝統工芸品に認定されました。平成15年には勝山村が町村合併により富士河口湖町の勝山地区となり、平成23年からは「富士河口湖町勝山スズ竹伝統工芸センター」として勝山ふれあいセンター内で、笊づくりが継続されています。現在は主に60代～90代の地元の方が工芸センターに集まり、笊づくりの技術継承と製造販売を行っています。

富士勝山スズ竹細工の技術・工程

スズ切　富士山二合目に自生しているスズ竹を切り出す。

スズ割　スズ竹を4つ又は6つに割る。

ヘギ引き（肉取り）　割ったスズ竹の肉の部分をヘギ引き包丁を使って削る。

ヘゴかけ　「ヘゴかけ」の穴にヘゴを通し、ヘゴの幅をそろえる。

底こしらえ①　ヘゴを縦横3本ずつ網代に組む。

底こしらえ②　底を丸くするため、ヘゴを放射状にモジリ編みして広げる。

シッパ作り　モジリ編みしたヘゴを2本ずつ上げ下げして編んでいく。

腰入れ　底を平らにするとともに、立ち上がりをきれいにする。

胴あみ　縦ヘゴを曲げながら腰を立てて、ザルの側面を編む。

縁どめ　縦ヘゴを曲げて留める。

縁巻き　縁巻きヘゴ（新竹のスズ竹＝ノロッコ）を使って縁を巻いて仕上げる。

初板（はねいた）と呼ばれる作業台。
ザルを編む時に使用する台。
斜めに傾いた台で、長さ 40cm、高さは 15cm ほど。

スズワリ
スズ竹を目にそって割る道具

（左）カワハライ（中・上から）ヘギビキボウチョウ、ヒゴカケ、
ワリボウチョウ、はさみ（右）スズキリガマ

日常の道具として愛されるスズ竹細工

この地域ではスズ竹を使ったさまざまな種類の笊や籠が作られてきました。かつては野良仕事に使う大きいショイカゴやメシビツ、魚を入れる魚ビク等、多様な製品が作られており、特に米とぎ笊やそば笊は「甲州郡内ザル」として行商で広まり関東を中心に遠方へも広まっていたそうです。繊細でしなやか、かつ丈夫という特徴があるスズ竹の笊は、水切れがよく、丁寧に使えば30年でも長持ちするといいます。

現在は小ぶりの米とぎ笊や、皿状でやや縁がせり上がったそば笊の注文が多いそうです。製品は、地元の観光施設や道の駅等での販売のほか、注文による生産も行われています。そば笊は、地元の飲食店等からまとめて注文が入ることもあり、ひとつひとつ手作業のため時には生産が追いつかないこともあるほど。笊以外にも、バッグやコーヒードリッパーなど、現代の生活にあう新しい製品づくりにも挑戦されています。スズ竹工芸センターのセンター長・在原建男さんによると、現在の不安はスズ竹の素材が少なくなってきていることだそうです。気候変動の影響か、富士山の植生も変わってきており、かつてのように笊づくりに適したスズ竹を豊富に採ることが難しくなっているそうです。全国的にも竹細工の材料は減ってきているそうで、在原さんたちは、必要な量のみを適時採取するなど、採取地の保護に努めています。

スズ竹工芸センターには、地元で仕事をリタイア後に竹細工を習得したい、という方などが参加し、現在は常時10名程度のメンバーが集まって笊づくりに取組んでいます。ベテランから新しいメンバーへ、日々の制作を通して技術が受け継がれています。

戦時中、南方の軍需用に作られていた防暑帽体

スズ竹は細くしなやかなので、お米を研ぐ際に米粒を傷めずヌカだけを落とし、水切れもよいため、米とぎ笊として最適。

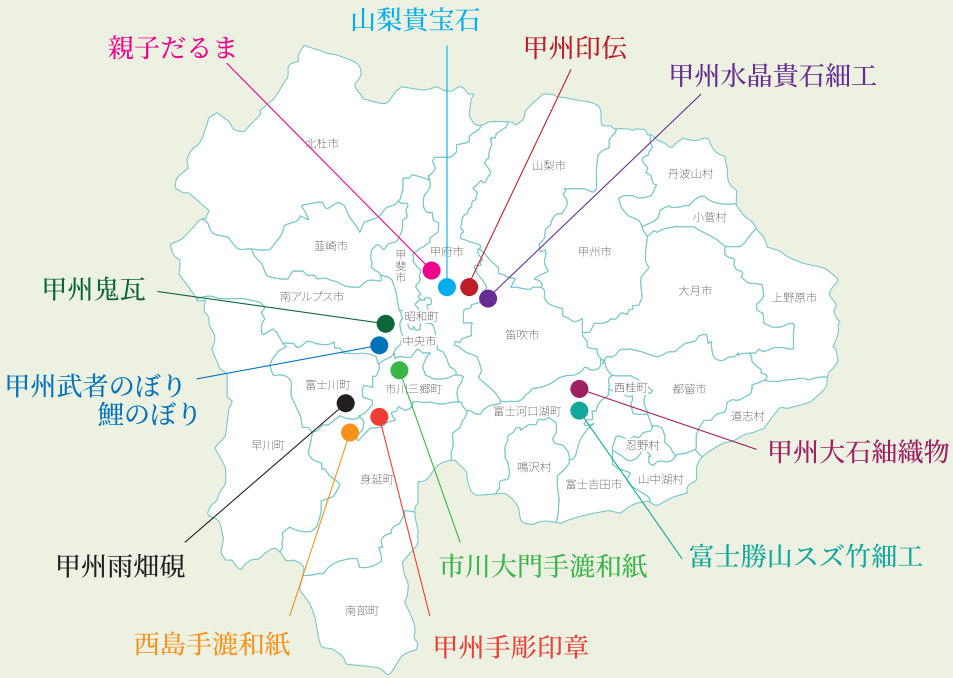
伝統的な笊だけでなく、バッグやドリッパーなど、
作り手のアイデアによる新しいものづくりも行われている。

■産地連絡先
富士河口湖町勝山スズ竹伝統工芸センター
https://www.fujisan.ne.jp/suzutake/
〒401-0310 山梨県南都留郡富士河口湖町勝山 4029-5
TEL：0555-83-2111　FAX：0555-20-9009

山梨の郷土伝統工芸品 年表

西暦	和暦・月	
1945 年	昭和 20 年	終戦　ポツダム宣言受諾
1964 年	昭和 39 年	東京オリンピック開催
1974 年	昭和 49 年 5 月	国「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」公布
1976 年	昭和 51 年 6 月	「甲州水晶貴石細工」伝統的工芸品に指定
1987 年	昭和 62 年 4 月	「甲州印伝」伝統的工芸品に指定
1988 年	昭和 63 年	やまなし伝統工芸館・開館
1994 年	平成 6 年 6 月	「山梨県郷土伝統工芸品認定要綱」制定
	平成 6 年 10 月	「甲州水晶貴石細工」「甲州印伝」「甲州雨畑硯」 「甲州大石紬織物」「手彫印章・手彫水晶印」 「甲州武者のぼり・鯉のぼり」「西島手漉和紙」 の 7 品目が山梨県郷土伝統工芸品に認定
1995 年	平成 7 年 1 月	「親子だるま」「甲州鬼瓦」 の 2 品目が山梨県郷土伝統工芸品に認定
1996 年	平成 8 年 9 月	「山梨貴宝石」が山梨県郷土伝統工芸品に認定
1998 年	平成 10 年 8 月	「富士勝山スズ竹細工」が山梨県郷土伝統工芸品に認定
2000 年	平成 12 年 7 月	「甲州手彫印章」伝統的工芸品に指定

山梨の郷土伝統工芸品 MAP



―山梨の伝統工芸品を知る―

【やまなし伝統工芸館】 http://www.teikyo.jp/crafts-yamanashi/
〒406-0032 山梨県笛吹市四日市場 1566
TEL 055-263-6741 FAX 055-263-6742

―山梨の伝統工芸品を買う―

【かいてらす（山梨県地場産業センター）】 http://www.kaiterasu.jp
〒400-0807 山梨県甲府市東光寺 3-13-25
TEL 055-237-1641 FAX 055-228-9185

謝辞
調査取材・資料提供にご協力いただいた、各伝統工芸品産地組合、生産者のみなさまに心より感謝申し上げます。

【企画・編集】
秋本 梨恵・串田 賢一（山梨県産業技術センター）

【画像提供】
山梨県水晶美術彫刻協同組合
山梨ジュエリーミュージアム
土屋華章製作所
富士河口湖町 地域おこし協力隊
井上染物店
若草瓦会館

【参考文献】
勢竜軒茶翁：甲府買物獨案内（藤屋伝右衛門）（1854）
甲府商工会議所：水晶宝飾史（1968）
日本伝統産業研究所：日本の伝統産業（工芸編）（通産企画調査会）（1976）
遠藤元男・児玉幸多・宮本常一：日本の名産事典（東洋経済新報社）（1977）
日本伝統産業研究所：日本の伝統産業（物産編）（通産企画調査会）（1978）
楠本憲吉監修：ふるさとの民芸・工芸品〈特選 230〉（日之出出版）（1980）
山梨県／監修：山梨の伝統工芸品：（東京電力山梨支店）
山梨県経済部商工課：山梨県工業現勢，第 1 集（1949）
山梨県水晶宝飾協同組合：ジュエリー今昔物語（2019）
出澤利美：甲州印伝と私（株式会社印傳屋上原勇七　広報部）（1987）
印傳博物館：印傳博物館図版目録　資料篇（2005）
印傳博物館：印傳博物館図版目録（2019）
山梨県広聴広報課：山梨てくてく , VOL.18 2020 SPRING（2020）
佐藤森三：岩間村誌（岩間村）（1951）
遠藤秀男：富士川―その風土と文化―（静岡新聞社）（1981）
大滝英子：きもの風土記（読売新聞社）（1967）
伝統染織 新紀行 9 大石紬 , 月刊染色アルファ , 10 月号（1994）
加藤将太／企画・編集：西嶋和紙 公式ブックレット（西嶋和紙工業協同組合）
有井幸太：「西嶋紙物語」望月清兵衛伝（西嶋を記録する会）（2017）
紙の博物館編：百万塔 第 59 号（紙の博物館）（1984）
全国商工出版サービス：現代に甦る加賀美鬼面瓦〈山梨県若草町〉, Shokokai = 商工会 : 地域を結ぶ総合情報誌 31（1990）
若草瓦会館／編集：KAWARA 鬼瓦 甲州鬼瓦の伝統に触れてみよう（パンフレット）
工房便り のみおと 第 6 号（身延山大学仏教学部 国際日蓮学研究所 仏像制作修復室）（2020）
井上染物店：甲州武者幟・鯉のぼり（パンフレット）
山田徳兵衛：日本の郷土玩具（鹿島研究所出版会）（1967）
牧野玩太郎・稲田年行：郷土玩具 第 1（紙）（読売新聞社）（1969）
森瀬雅介・斉藤岳南：日本の土鈴（徳間書店）（1977）
山梨県広聴広報課：山梨てくてく , VOL.04 2016 AUTUMN（2016）
勝山村史編纂委員会：勝山村史（勝山村役場）（1999）
日本産業協会：全国副業展覧会報告，第 3 編（1926）
農林省農務局：副業生産品商況調査（1926）
鈴木彌市：軍用需品に就いて，工藝ニュース，11（4）（1942）
勝山村役場：甲州郡内ザル（1982）
樽松そのこ：山梨の工藝調査・勝山村のスズ竹細工，民藝，544（1998）
久野恵一・萩原健太郎：民藝の教科書 4 かごとざる（グラフィック社）（2013）
久野恵一：久野恵一と民藝の 45 年日本の手仕事をつなぐ旅 いろいろ 1（グラフィック社）（2016）

山梨県：“山梨県の郷土伝統工芸品”
https://www.pref.yamanashi.jp/shouko/kogyo/densan/index.html
帝京大学 やまなし伝統工芸館：“山梨の伝統工芸”
http://www.teikyo.jp/crafts-yamanashi/
伝統工芸 青山スクエア
https://kougeihin.jp
山梨県宝石美術専門学校：“ジュエリー産地やまなしヒストリー”
https://www.pref.yamanashi.jp/houseki/jewelry/yokoso/index.html
山梨県水晶美術彫刻協同組合：“甲州水晶貴石細工の歴史”
https://suishou.jp/suishou/history
六郷印章業連合組合：“はんこの歴史”
https://www.rokugoinsho.com/ はんこの歴史

本冊子は、平成 31 年度～令和 2 年度 山梨県産業技術センター経常研究
「山梨県郷土伝統工芸品に関する調査研究」の一環として制作しました。

「手から手へ、伝統をつなぐ 山梨の郷土伝統工芸品」
発行日　2021 年（令和 3 年）3 月 31 日
発　行　山梨県産業技術センター
山梨県甲府市大津町 2094　電話 055-243-6111